其角堂永機の俳諧活動

――幕末維新期編――

越後敬子

はじめに

明治初期、政府は国民教化のために教導職制度を制定した。これにより僧侶や神官、歌舞伎俳優に落語家・講談師までもが教導職に任命され、国民教化の一翼を担った。俳諧師もまた例外ではなく、旧派の代表的宗匠三森幹雄は教導職を拝命し、俳諧明倫講社を設立して俳諧による国民教化を目指した。[注1]

同じ頃、旧派宗匠のもう一方の雄、其角堂永機は、俳諧の茶の湯に、千句興行にと遊び、教導職とは全く関わりのない活動を行っていた。永機について勝峯晋風氏は『明治俳諧史話』[注2]で次のような逸話を紹介している。

明治の旧派を通じて其の門閥を誇った永機は、嘉永六年津藤の香以の後援で『楪口集』を刊行した時分は深川座で満足してゐたが、文久三年不忍池畔の其角堂で『不忍千句』五吟を興行、卓朗の序を得て出版した後は其角堂を庵号として、いつどこからか半面美人の点印を手に入れた。其角堂の正系たる承認を得たのは一具庵尋香の尽力で明治以後の事と云はれる。（一〇頁）

俳諧教化策もさる事ながら世間を忘れて俳諧に遊ぶ有閑的な気分で、一流の宗匠は茶の湯俳諧をより〳〵行ってゐた。永機は特に茶俳一味の精神に徹した一人といはれる。（一一二頁）

永機は旧幕のお茶坊主から俳諧師となったので、先代

鼠肝の深川座を背景に持ってゐた。その其角堂は文久三年『不忍千句』を興行して以来である。（一一九頁）

永機の父鼠肝はお茶坊主から深川座の点者となったので、其角の年譜を編むやうな考證的学風の人物と思へない。（二四三頁）

永機の父鼠肝は江戸城のお茶坊主から深川座の点者となったこと、永機もお茶坊主から深川座の点者を経て、後に其角の点印「半面美人」を入手し其角堂と称したことなど、永機の経歴について興味深い記述を残している。勝峯氏は自序で、「亡父諭風居士からとき〴〵聞いてゐた俳壇の故老、それは旧派の宗匠であった人々を歴訪して、そのむかし話を筆録する事を心掛けた。永機や幹雄など新派俳句の敵視した代表人物は歿した後で、大夢庵千畝といふ七十余の老俳を下谷に訪れ、或は夜粧庵化悉と号するこれは父が月並に入る時の宗匠であった人、及び東杵庵蔦斎翁、それから向島三囲に其角堂機一老の許などでいろ〳〵聞き得るところがあった」と述べるように、本書は明治の旧派俳人に関して当時の俳壇の古老からの聞き書きをまとめたものであるという。それ故、現在残された資料からは計り知ることのできない貴重な情報が少なくない。

ここで『俳文学大辞典』[注3]から「穂積永機」の項を引用しておく。

穂積永機（ほづみえいき）　俳人。文政六（一八二三）・一〇・一〇～明治三七（一九〇四）・一・一〇、八二歳。江戸下谷（東京都台東区）生れ。本名、善之（美之）。別号、老鼠堂・阿心庵。六世其角堂鼠肝の長男。明治三年、七世其角堂を継承。同二〇年、八世を門人田辺機一に譲る。上野不忍池畔・向島三囲神社・芝紅葉山と移居。時事新報などの選者として著名。弟子に小平雪人がいる。墓所は東京都港区高輪の上行寺[注4]。著作『枯尾花』（明26）『俳諧自在』（明31）ほか。［句］「煙消え灰消えて終に何もなし」

永機の生きた時代から百年以上が経過した現在、勝峯氏のように同時代の古老から話を聞くことはできないが、本稿では現代に残された資料によって『俳文学大辞典』その他先行研究[注5]の内容に補足、又は訂正を行い、明治最後の大宗匠其角堂永機の俳諧師としての生涯を明らかにしたい。今回は紙幅の都合によりその前半生、幕末維新期までを対照とする。

一　永機の出自

永機は自らの出自について多くを語っていない。唯一残

されるのが明治三十一年（一八九八）刊行の自撰句集『新五元集』巻末の短い文章である。

永機、姓ハ穂積、名ハ美之。文政六年十月十六日、於下谷誕生焉。父ハ老鼠肝、母ハ里見。此日曇天亥月亥日亥刻生る。廿七歳にして得度。恵澄大和尚ニ十重禁を拝与畢。

永機は文政六年（一八二三）十月十六日、父老鼠肝、母里見のもと江戸下谷に生まれ、恵澄大和尚から十重禁を授けられて二十七歳で仏門に入ったことになる。本書は永機自身が版下の筆を執っているため、以上の内容に誤りはないものと考えてよいであろう。

これにより『俳文学大辞典』で十月十日としていた永機生誕の日を、十六日に訂正することができる。また、名前の表記について永機自身は「美之」としているが、『俳文学大辞典』では「善之（美之）」としている。これは「美」と「善」のくずし字に類似した書体があって判別できなかったためかと考えたが、あるいはどちらも「よしゆき」と読むため、永機自身が両用の使い方をした例があったのであろうか。現在までに確認できなかった。

母については「里見」という名を記すだけであるが、明治十六年の永機編『新花摘』自序に、「天保五年六月廿三日のゆふべ、母に別れし悲しみ、年々歳々いやましてわすれがたくあれば」と記すところにより、没年月日は天保五年（一八三四）六月二十三日、永機が十二歳の時のようである。[注6]

また父の老鼠肝は嘉永二年（一八四九）八月二十八日に没したことが、明治三十三年の永機編『温古』「鼠肝翁臨終の記」に綴られている。時に永機は二十七歳である。この中では老鼠肝が前年睦月より病を患っていたこと、八月二十三・二十四・二十七日の病状、二十八日早暁に臨終を迎えたこと、三十日の土葬の模様が描かれている。

廿七日夜半、山夕[注7]参りてあくる夜は御夜伽可仕と約して八時過かへりぬ。明告る鶏の引音さへ幽になりぬる頃息絶給ひぬ。終に斯とは兼てなれど、今のやうにおもはれ侍る。かなしくもしたはしくもなつかしくもならはしの水などまいらせて

その果は我泣声や秋の風　　機

三十日　本所原場長建寺に土かひ納めたり。

今啼し蝉も脱のうき世哉　　、

このほかに、老鼠肝の辞世句「けふきりとおもへば猶や秋の昏」や、二十九日の野辺送り・四十九日・百箇日それぞれの永機句も添えられている。なお、『新五元集』中には「父の骸を改葬して　村しぐれ髑髏に袖を覆ひけり　永機」の句があり、本所長建寺に葬られた遺骸はのちに改葬

されたらしい。父老鼠肝はほかに鼠肝、螺窓等の号でも呼ばれるが、本稿では以下老鼠肝と統一して呼称する。

さらに永機は二十七歳、つまり父の没した嘉永二年に得度したと述べているが、同じく『新五元集』には嘉永四年正月二十八日に受戒したとの前書きを持つ句がある。

嘉永四年正月廿八日先考の忌日なれば、東台浄名院恵澄律師に戒を受くる事になりぬ。只白うるりのものに染らぬ事をねがふ。

梅が丶は教への外や五百戒　　永機

この二年の差をどのように考えるべきかわからないが、嘉永四年刊行の『俳諧人名録　三篇』（惟草庵惟草編）では「江戸下谷和泉橋通り御徒町　法名無諍　善哉庵」と法名まで紹介されていることから、いずれにしても嘉永二年の父老鼠肝の死を契機として、同四年までに仏門に入ったことは間違いないようである。

二　俳諧活動の始まり―其角座点者

冒頭にあげたように、勝峯氏は永機の父老鼠肝、そして永機も深川座の点者であったと記している。深川座とは其角座の別称として用いられていたと思われる。江戸風点取俳諧宗匠の中心的集団である其角座は、一世湖十[注8]に始まる。一世湖十は其角門とされ、秋色から其角の点印を授与され其角座を主宰したが、其角と直接の交渉を持っていたかは明らかでない。一世湖十は延宝五年（一六七七）生まれ、元文三年（一七三八）に六十二歳で没したといわれる。本姓を森部氏といったが後に深川氏を名乗り、以後代々の湖十がこれを継承している。一世湖十が初め深川に住んでいたことによるものらしいが、勝峯氏のいう深川座の呼称はこれに拠っているのではないだろうか。別号に亀休板、木者庵、老鼠、老鼠肝、鼠肝等がある。代々の湖十は『俳文学大辞典』によれば七世まで継承が確認されている。襲号の時期は二世が享保十八年（一七三三）、三世は二世没後の延享三年（一七四六）以降、四世は安永三年（一七七四）頃、五世は寛政（一七八九～一八〇〇）初年頃、六世は享和元年（一八〇一）、七世は六世没後の天保四年以降となっている。

江戸座の高点付句集『俳諧觸　嘉永再興本』[注9]（七世沾山編、嘉永元年自序）には、嘉永元年当時の其角座点者七名が載る。各人の別号・住所・選句の傾向を抜粋すれば以下の通りである。

其角座
宝晋斎　深川鼠肝
和泉橋通り御徒町

強弱交るべし。実情・在体、其時々の時候の句、古体の買色よし。

一乗庵　深川木髪

駿河台　赤井同居

三句の渡り第一。強弱交べし。神釈・恋・実情・買色・軍体よし。

晴窓　深川湖十

本所表町

三句の渡り第一。強弱交るべし。神釈・恋・無常・売色・軍体・在体・松島・京之句。

涛窓　深川恋稲

新和泉町玄冶店

三句渡り第一。強弱交るべし。神釈・恋・無常・人情・軍体・山城・大和・摂津・播磨・紀伊国。茶事・買色・虎・猿・犬・猫・蛸。季の扱ひに高点あり。

桃窓　深川山夕

本郷竹町一軒道

わたり申におよばず。神釈・恋・無常・武体・在体。おかしみ・世話・買色・歳暮・比喩・弓・能の句。寂たるもよし。

善哉庵　深川永機

鼠肝同庵

三句の渡り第一。強弱交るべし。神釈・恋・無常・軍体・在体・実情・茶の句よし。買色もよし。

朗窓　深川宝井

四番丁三浦同居

三句の渡り第一也。神釈・恋・無常・弓馬の句よし。

当時の其角座には宝晋斎（鼠肝）・一乗庵（木髪）・晴窓（湖十）・涛窓（恋稲）・桃窓（山夕）・善哉庵（永機）・朗窓（宝井）という七名の点者がいた。この中で宝晋斎が老鼠肝、善哉庵が永機である。また、晴窓の別号を持つ湖十が七世湖十に当たり、老鼠肝はこの門人であったようである。

三浦若海編『俳諧人物便覧』[注10]に次の記述がある。

永機　英花庵　螺窓　於淡水　七世湖十門　江戸深川氏　永機は二世湖十の初名也

本書の影印版編者加藤定彦氏の解説によれば、本書は弘化元年（一八四四）以降、安政三年（一八五六）以前の成立であるという。ちょうど『俳諧觸　嘉永再興本』の刊行された時期を間に挟むが、見出し人名の「永機」とは本稿で問題にしている永機ではなく、内容からいって永機の父老鼠肝を指していると思われる。つまり大ざっぱに言って、

弘化の頃には老鼠肝が永機を号し、それから間もなく、嘉永元年をそう遡らない時期に父から子へ「永機」号の襲号が行われたのではないだろうか。英花庵の号は初見だが、其角の別号でもある螺窓の号を老鼠肝が名乗っていたことは他書により確認できる。「於淡水」とは何を表すのかわからない。老鼠肝は七世湖十門で深川氏を称していた。

『俳諧觸　嘉永再興本』の刊行された嘉永元年は老鼠肝の没する前年であるが、老鼠肝は宝晋斎を庵号として和泉橋通り御徒町に住居を構える其角座の点者であった。そして息子である永機は善哉庵を号し、父のもとで同じく其角座の点者をしていた。この時永機は二十六歳であった。老鼠肝をはじめ木髪・恋稲・山夕・永機・宝井ら其角座点者のすべてが深川姓を冠しており、代々の湖十と同様に深川氏を称していたのだろう。また、鼠肝・木髪・恋稲・山夕・永機・宝井などの号は代々の湖十が名乗っていた別号であり、其角座の点者がこれを継承していたのであろう。

さて、嘉永元年までには其角座点者の列に連なっていた永機だが、これまでの調査ではそれ以前の俳書への入集を見出すことができなかった。『俳諧觸　嘉永再興本』以降永機の名が初めて現れるのは先にもあげた嘉永四年刊行の惟草庵惟草編『俳諧人名録　三篇』である。

江戸下谷和泉橋通り御徒町　法名無諍　善哉庵
　　極楽は法師がうそよ華盛　　永機

嘉永四年当時、永機は善哉庵を庵号として御徒町に住まっていたことになるが、三年前の『俳諧觸　嘉永再興本』に記すところと変わっていない。

ところで、注5にあげた大塚毅氏『明治大正俳句史年表大事典』によれば、永機は弘化元年には二十二歳で宝晋斎永機と称し、父の死の翌年、嘉永三年には剃髪して上野不忍池畔に結庵したとある。しかしこれまでの考察から、弘化頃に宝晋斎永機と称していたのは父老鼠肝と考えるべきであろう。嘉永三年の永機の住まいについては『俳諧人名録　三篇』の記述が正しいとすれば下谷御徒町であるが、この点に関してどちらが正しいのかを今回までに明らかにすることができなかった。上野不忍池畔に庵を持ったことが確認できるのは、それから十三年後、文久三年（一八六三）のことである。

永機が初めて俳書を上梓したのは嘉永五年奥『楪口集　初編』である。続く二編は翌六年の奥書を持つ。書名は其角の「ゆづり葉やくちに含て筆はじめ」の句による。本稿冒頭に引いた勝峯氏の記述によれば、本書は細木香以の後援を受けてなったものであるらしい。

香以とは仮名垣魯文「再来紀文廓花街」[注11]や森鴎外「細木香以」[注12]の主人公、江戸山城河岸[注13]に店を構える摂津国屋藤次

郎のことで、江戸中期の豪商紀伊国屋文左衛門になぞらえて「今紀文」と称された幕末の大通である。摂津国屋は表向きは升酒屋を家業としていたが、大名への金子用達をする富商であった。香以は文政五年生まれ、永機より一歳年長である。俳諧ははじめ可布庵逸淵門、のち永機門となり香以と称した。「再来紀文廓花街」によれば、香以は十七歳の頃から遊里に出入りしていたらしい。香以の父龍池存命のうちは父に遠慮しながらの遊所通いであったが、安政三年、香以三十五の年に父が亡くなると、誰憚ることなく遊蕩にふけり家業は全く顧みることがなかった。香以の周りには芸人や文人ら多くの取巻連がいたが、永機もその一人であった。遊蕩がたたって早くも同六年には身代が傾き始め、文久二年に店を親戚に渡し、浅草馬道の猿寺境内に隠居した。そこでは山城河岸の店からの仕送りで生活していたが、やがて昔なじみの芸人達の溜まり場となり、これを饗応するための負債に責められてここでの生活も立ちゆかなくなった。そして翌三年には下総国寒川に退隠せざるを得なくなったが、永機は寒川まで書を送って香以の無聊を慰めたという。その後慶応二年（一八六六）には江戸に戻り妹婿のもとに居候していたが、明治三年九月十日、四十九年の生涯を閉じた。

本書二編の跋文は香以が執筆している。

わが深川座の俳諧は流行日々に新たなる事、旧きを捨て新きを迎ふる花街の趣に似て、虚中に実をこめ手れん手くだの句作をむねとす。されば見かへり柳を契情の賢なるにたぐへて先師も戯れ給ひけらし。そも〳〵四時の風光に紋日節句の趣を兼れば、歌仙の一順は抱一座の客に似て、発句のたけ高き体はお職のおいらむたるべし。脇第三の作法つゝましげなるは引ツこみの突出しの如く、しめやかなる場を引ったつる世話句の出恋はけんばむ芸者の賑はゝしき姿にひとしく、神祇釈教恋無常すべて遊里の心ばえあらざるはなしとて、此道のわけ知りと呼るゝ永機ぬし、こたび初会の約束をたがへず裏なじみの集冊をつゞりて、流行に遊ぶ俳諧の通家に贈る。おのれ此人のあほりに乗て、一座のつき合に其趣を一寸しるす。

まだ父龍池は存命で、この時香以は部屋住みの三十一歳であった。歌仙の連衆を娼家の客にたとえ、格調高い発句を遊女御職にたとえ、連句の脇第三の作法を引込禿の突出しにたとえ、恋の句を見番芸者の華やかな姿にたとえるといった具合に、いずれも俳諧を花街の風俗にたとえ、「神祇釈教恋無常すべて遊里の心ばへあらざるはなし」とまで述べている。あまりに通人趣味に過ぎる文章である。冒頭に「わが深川座」とあるように、香以は永機門として深川

座の一員に連なっていた。勝峯氏の指摘のように、香以は本書に対する後援のほか、深川座の運営そのものにも経済的な援助を行っていたであろう。なお、香以という幕末の大通の存在は、その後の永機の俳諧活動に重大な影響を与えたと考えている。そのことについては稿を改めて言及したい。

本書はこのように不真面目ともいえるような香以の跋文を持つが、内容は至って真面目なものである。初編に三つ物三十（うち永機は二十六に参加）、表六章三（同三）、半歌仙二（同二）、「芳節」として諸家の春の発句を、二編に三つ物十九（うち永機は十九すべてに参加）、表六章六（同五）、表八章一（同一）、半歌仙一（同一）、歌仙一（同一）、「芳節」として諸家の春の発句を収める。入集者は永機・江左・木髪・湖十・恋稲・山夕・宝井・冬映・田社ら湖十系統の号を持つ俳諧師が中心で、当時中央俳壇に名を馳せていた惟草・顧言・氷壺・卓郎・西馬・梅室等も発句を寄せている。その他ほとんどは無名の人々である。父老鼠肝が没して三年、本書は永機が其角座点者として自派の歳旦帖を刊行したものだと思われるが、翌安政元年の三編以降は確認できず、刊行されたかどうか不明である。

続く安政年間（一八五四～一八五九）は特に目立った俳諧活動を行っていない。いくつかの俳書への入集が見られるだけである。管見のものを以下に年を追って示すと、安政二年の『一翁四哲集』（惺庵西馬編）・『さとしぐれ』（五休編）にそれぞれ発句一句、四年の『雪沙遠』（雪中庵鳳洲編）・『春秋稿　九編』（春秋庵梅笠編）に発句一句、五年の『さきもり集』（守轍編）・『当宇太集』（太撫編）に発句一句、六年の『俳林良材集』（双雀庵氷壺編）に発句一句、同年『草の蚊屋』（一巣寸阿弥・六造子誠阿弥撰）に発句二句と永機一座の五吟百韻一巻が入集している。

この頃の永機の様子を「再来紀文廓花街」によって知ることができる。安政四年十一月、香以が現存画家三十六名に鯉を描かせた記念に「鯉の連句」を興行したというが、この時永機は宗匠として招かれている。また同六年夏に香以が江の島・鎌倉・金沢を巡覧した際、月の本為山・佳峰園等栽・金屋竺仙[注14]らとともに永機も同行している。永機は其角座の点者として点料を得る生活を送りつつ、家督を継いで間もない全盛期の香以の取巻として諸所に遊んでいたのであろう。

万延元年（一八六〇）から文久二年にかけて、永機は足かけ三年にわたり関西方面を巡歴している。その折に上梓されたのが『庚申集』と『辛酉集』である。

『庚申集』は庚申（万延元年）晩冬の奥書を持ち、永機が舟左・鳧水とともに巻いた三吟歌仙を中心に刊行したも

のである。時代は後のものになるが大正十二年刊『新選俳諧年表』[注15]によれば、舟左は大阪の人で武富氏、葛の本と号した。また鳧水は京都の人で丹羽氏、洗々居・田蓑庵などと号し芹舎門、明治三十年に没している。永機はこの年初時雨の降る頃から大阪に滞在していた。

内容は永機・舟左・鳧水の三吟歌仙一、諸国諸家の発句、舟左の奥羽・蝦夷旅行中の歌仙と発句、舟左・鳧水の両吟歌仙一・舟左・永機の両吟歌仙一から成る。

永機の発句は左の一句を収める。

野田の玉川は藤の名所に成てはつかにゆかりの池を残し、田蓑の島は橋の名におほせて米邸甍を並べたり。さればきのふの雨はけふのみぞれにふり替る世を迎るとしも又旅也と、ことしはなにはに冬籠して

とし暮ぬ梅に草鞋を懸ながら　　永機

この句の前書きに「ことしはなにはに冬籠して」とあるので、この年永機は大阪で越年したようである。

明けて文久元年春には『辛酉集』を上梓している。序文は永機が版下の筆を執り、舟左・永機・鳧水連名の書簡の体裁をとっている。

ます〳〵御風栄奉南山候。陳ハ去年の庚申集にもとづき辛酉集とおもひ立候より、辛酉を信友にとりなし、なにはの七歌仙を露しる昔の口真似に……

永機・舟左・鳧水が「なにはの七歌仙」、つまり当時大阪で著名であった蟻兄・杜鴻・素屋・麦舎・松隣・笠洲・鼎左のもとを訪ねて巻いた四吟歌仙七巻を上梓したものである。途中舟左が事情により離れ、笠洲・鼎左との歌仙は満尾していない。

本書を上梓した以外のこの年の動静は不明だが、前年に引き続き大阪で新年を迎えたようである。

文久二浪花にて

おとろへや芝居見て泣花の春　　永機（『新五元集』）

この句によって少なくとも文久二年春までは大阪に滞在していたと考えられる。

三　其角堂の呼称

永機が其角堂として世に知られるのは文久三年からである。この年正月の奥付を持つ『現存名家山海集』（半青居新甫・閑樹園菊雄共編）に永機の発句一句が採られるが、巻末の人名録に

永機　同（東都）不忍弁才天社内　一号　其角堂

と紹介されている。これ以前に永機の庵号を其角堂と記したものはなく、この年をもって其角堂を呼称したと考えて

もよいのではないだろうか。

この年の春、不忍池畔の其角堂において俳諧千句興行が行われ、その内容が『しのばず千句』と題して刊行された。本書は龍尾園香城編、孤山堂卓郎校閲、素阿弥貫乎版下、其角堂蔵梓。卓郎（寛政十～慶応二）は伊豆国三島の人で江戸住、大梅居大梅の門人で『大梅居家集』等の編著がある。香城について詳細は未調査だが、慶応三年（一八六七）には卓郎の遺志を継いで「俳家新聞」を創刊するなど、卓郎と近しい俳人であったようで、そのほかにも俳書の序文などにその名を残している。本書巻末の香城跋に

今茲春月。与二一友人一相商。聯二千句於江武不忍池其角堂中一。凡十旬而竣レ事。遂奉二之祠前一。（中略）所レ企二望於世之君子一也。共聯レ句者五人。其角堂永機。大江舎貫乎。藤島太年。青裳居伍柚。及龍尾園香城也。

と記すように、この興行では其角堂永機、大江舎貫乎、藤島太年、青裳居伍柚、龍尾園香城の五名が上野不忍池畔其角堂において百韻十巻千句を十日間ほどで満尾し、其角堂の祠前に奉納している。その他の連衆について簡単に記すと、藤島太年（文政六～明治二十）は『俳文学大辞典』その他によれば、幕臣で俳諧は為山門、江戸住であったが維新時に駿河国に移住、のちに再び東京に戻ったという。大江舎貫乎は生没年など未詳だが、文久元年に自らの諸国漫遊の記念集『若しのぶ』を刊行し、また慶応二年には一籟居琴堂編『初春の御慶帳』に序文を草するなどしている。[注16] 残る青裳居伍柚については今のところ全くわからない。

香城の跋文、そして卓郎の序文にも一切記されていないが、これ以前に永機を其角堂と記したものがないこと、また不忍池畔の其角堂に千句という形式で奉納していることから鑑みて、この俳諧千句興行は永機の其角堂呼称のお披露目の意を込めたものではなかったかと考えている。それまでの其角座ではなく其角堂を称することの意義についてはこのあと考察する。なお本書には『楪口集』にあるような香以の関与は見受けられないが、この年香以は下総国寒川に閑居しており、永機を支援する余裕は持ち合わせていなかったのであろう。

その後元治・慶応と元号が推し移るが、この頃の永機がどのような活動を行っていたか、今のところ詳細は不明である。管見の範囲では、元治元年（一八六四）の俳人番付『諸国俳諧雷鳴競』に「西方　前頭十一枚目　其角堂永機」と記され、慶応三年の『菩提子』（莫作庵三水編）、『六庵集』（於曽此一編）にそれぞれ発句一句が入集するのみである。

ところで其角堂の称であるが、『俳文学大辞典』に「明治三年、七世其角堂を継承」とあるのは以上のことから明

らかに誤りで、文久三年に自ら名乗ったことになる。さらに永機を其角堂七世、老鼠肝を六世と位置づけることは正しいのであろうか。なぜなら六世以前の其角堂主が見当たらないからである。永機の跡を嗣いで其角堂八世を称する田辺機一は『発句作法指南』[注17]で次のように言及している。

其角翁伝

第一世晋子其角翁より、伝来の道統を先づ云ふべし、第二世を老鼠肝湖十と号し、元文三年二月卅日没す、第三世を霜柱庵風窓湖十と号す、安永九年五月十五日を以て没す、第四世を黄花庵風窓湖十と号す、寛政元年五月廿七日を以て没す、第五世を木者庵湖十、後江左と号す、天保四年十月廿日を以て没す、第六世を螺窓永機、後鼠肝と号す、嘉永二年八月廿八日没す、第七世を宝晋斎永機と号し、始め不忍池畔に住みしが、慶応の頃晋子其角翁が昔時夕立の句を詠まれて名を残されし、隅田川の東岸、三囲神社内に一小堂を営み、其角翁の肖像を安置し、其傍に草庵を営みて、其角堂と号し、こゝに移らる、予が今住める草庵是なり、道統の経歴大略かくの如し

ここに示されているのは其角堂という庵号の継承順ではなく、其角（晋派）の道統であるようだ。先に確認した代々の湖十継承者の没年月と比べると多少誤りがあるようだが、初世其角、二世は一世湖十、三世は三世湖十、四世は四世湖十、五世は六世湖十、六世は老鼠肝、七世は永機としているとみてよいだろう。歴代の湖十のうち、二・五・七世が入っていないのは何か意図があるのか、それとも湖十の継承について認識不足のためなのかわからない。管見の範囲では、これら晋派を継承したとされる湖十たちが其角堂を称したという記録がほかに見当たらないのである。

それは父老鼠肝についても同様である。明治十四年に永機が刊行した『俳諧みゝな草』は、老鼠肝の三十三回忌にあたって遺稿をまとめたものであるというが、その流美跋に「晋派七世の主永機叟は、ことし其先考螺窓居士の清浄忌をいとなみ為追福、居士が遺稿のそが中なる晋子年表及び句解を上木してみゝな草の名あり」と述べ、永機を晋派七世と呼んでいる。また同書中に描かれた老鼠肝の肖像画には「晋子六世螺窓居士肖像」と題が付けられ、老鼠肝を其角堂六世であるとは言っていない。

『発句作法指南』では、慶応の頃に永機が不忍池畔から三囲神社境内に草庵を移転[注18]して、その庵室を其角堂と号したと述べている。先に見た『しのばず千句』跋に「不忍池其角堂」とあるので、三囲神社移転後に其角堂を号したという点は誤りで、不忍池畔の庵室もすでに其角堂と呼んで

いたのであろう。しかしその庵号は永機以前から伝わるものではなかった。つまり永機を其角堂七世と称することは誤りで、『発句作法指南』に従えば、自称ではあるが晋派（晋子）七世が正しいということになる。よって老鼠肝も其角堂六世ではない。永機は其角堂を称することで其角座の一点者という身分から飛躍し、自らを晋派道統の継承者として位置づけたのである。

最後に、当時の世相について簡単に触れておきたい。天保以降、相次ぐ内憂外患によって幕藩体制は崩壊の一途をたどっている。国内で薩摩・長州藩をはじめとする雄藩が力を強める中、嘉永六年には浦賀沖にペリーが来航し幕府に開国を迫った。その強硬な姿勢に、幕府は翌安政元年には日米和親条約を、同五年には日米修好通商条約を締結せざるを得なかった。その後幕府の統制力は衰え、尊皇攘夷論が高まり倒幕運動へと展開していく。そして慶応三年、十五代将軍慶喜は大政奉還を上奏したのである。しかしこれを不服とする旧幕府軍と新政府軍との間で、翌明治元年一月の鳥羽・伏見の戦いを皮切りに戊辰戦争が勃発した。彰義隊が上野寛永寺に立てこもった上野戦争、会津藩をはじめとする東北諸藩の戦争、榎本武揚らが箱館五稜郭に立てこもった箱館戦争が起きたが、いずれも新政府軍によって鎮圧され、明治新政府によって国内が統一されたのである。

これら内外の憂慮に対して、永機も全く無関心であったわけではない。ペリーの来航時には、退帆に安堵して次の句を詠んでいる。

甲丑正月[注19]亜米利加舟来泊　おなじ月の廿五日退帆

返す端の猶しづかなり春の波　永機（『新五元集』）

また明治元年五月十五日の上野戦争では、

五月十五日、上野の戦を遁れ出て

血を流す雨や折ふし杜鵑　永機（『新五元集』）

の句を残している。殊に上野戦争は、当時不忍池畔に庵を構えていた永機にとって生命も危ぶまれる大事件であったはずである。上野戦争からちょうど一年に当たる明治二年五月十五日、永機は当日を回顧して次のような前書きの長い句を詠んでいる。

慶応四年五月十五日、此夜も如例遊里に在し也。波を知らず漸夜も明なんとする頃、東四明の方に当て筒音の聞ぬればすはやとて驚き寤たれど、させる思慮もなければ酒のみて又寝したり。昼過る頃よりして三の輪坂本の方に炎立のぼり、南のかたの炮声はいさゝか鎮ぬれば、庵に残せし娘の事心にかゝり、艸鞋引結び傘引提て出ぬ。道さま〴〵にたどり下谷にかゝれば、焼討すよとてそこ爰よ

り火出たり。討れし者の伏たるをも見向ず行ほどに、官軍の武士どもに捕へらるゝ事あまたゝび。かふして不忍に帰り侍ぬ。此地は三方に山をひかへて水面猶凄し。堂に昇りて西北をのぞめば、水戸加賀榊原等の邸内大炮を並べ武者ならざる所もなし。都て今日の戦争人耳に残ればもらし侍りぬ。さるに程へて吾往ほとりの酒店ニ一人の武士来て語りていふ。それの日八時過るばかりにひとりの僧不忍をさして行あり。かゝる戦場をあやしのものよとてねらひ打にせばやと先を争うひま、いかにしたりけん、見失ひてそのまゝすぎぬ。何ものにや、からき命助かりたりと笑ひしとなり。さうおもひ合すれば今月今日也。一周をみづから吊ひみづからまつりて灯下にしるす。

三石の外の茶めしに鰹かな　　永機（『新五元集』）

上野の山内で彰義隊と官軍が戦っていた頃、永機は不忍池畔にはおらず遊里に出かけていた。砲声に驚きはしたもののわが身に危険が及ぶことはないと思ったのであろうか、酒を飲み又寝をしたという。翌日庵に戻る道々、諸所で火事が起こり討たれた者の遺体もあった。目を覆うばかりの光景にさすがに身の毛のよだつ思いをしたことであろう。しかしながらそこで詠まれた句が「血を流す雨や折ふし杜鵑」であった。黒船退帆の安堵を春の波の穏やかなさまにたとえ、また上野の戦場の無惨なさまに咽から血を流して鳴くほととぎすを配するなど、実際に体験した世間の憂患を遠いこととして眺めているように感じられる。これこそが明治二十年代半ばに登場する正岡子規ら、いわゆる新派俳人たちに総攻撃を受ける所以であるかもしれないが、この時代の俳諧師としては、世間への関心もこのように表すことしかできなかったのであろう。

おわりに

以上、永機の出生から幕末維新期に至る前半生をたどってきた。資料に乏しく詳細に明らかにできたとは言い難いが、簡潔にまとめておきたい。永機は初め、父老鼠肝と同様に其角座（深川座）点者の地位にあった。点者として点料を得つつ、後援者である大通細木香以からは多大な経済的援助を受けていたであろう。香以の取巻として諸所に遊び、永機もまた通人の一人として華やかな暮らしを送っていたに違いない。その後幕末期には其角座の一点者から飛躍し、自らを晋派道統の継承者と位置づけ、やがて「明治最後の大宗匠」と称されるほどに活躍するのである。本稿では紙幅の関係から以上をもって擱筆し、明治期の活動と

香以とのつながりについては改めて述べる機会を得たい。

注

1 拙稿「明治前期俳壇の一様相―幹雄の動向を中心として―」（『連歌俳諧研究』第八十七号、平成6・7）

2 勝峯晋風氏『明治俳諧史話』（大誠堂、昭和9）

3 『俳文学大辞典』（角川書店、平成7）

4 上行寺は昭和三十八年に神奈川県伊勢原市に移転している。

5 その他、主な先行研究に次のものがある。
大塚毅氏『明治大正俳句史年表大事典』（世界文庫、昭和46）
市川一男氏『近代俳句のあけぼの』（三元社、昭和50）
村山古郷氏『明治俳壇史』（角川書店、昭和53）

6 『新五元集』中に、「嘉永五三月三日先妣臨終　花の世は斯なれどさても別かな」の句がある。この前書きによれば母の没年は嘉永五年ということになる。しかし『新花摘』で明治十六年が母の五十回忌にあたると記すので、没年は天保五年が正しいものと思われる。この句の前書きについては不明である。

7 山夕とは其角座の点者仲間。次章参照。

8 白石悌三氏「湖十覚書」（宮本三郎先生追悼論文集刊行会編『俳文学論集』笠間書院、昭和56）

9 『俳諧觸　嘉永再興本』翻刻は新日本古典文学大系72『江戸座点取俳諧集』（岩波書店、平成5）に所収。

10 加藤定彦氏編『俳諧人物便覧』（ゆまに書房、平成11）に影印が載る。

11 仮名垣魯文「再来紀文廓花街」は、「歌舞伎新報」第百十六号（明治13・12・23）から百四十二号（明治14・4・23）までの計十七回にわたって連載された。

12 森鴎外「細木香以」は、「東京日日新聞」及び「大阪毎日新聞」に大正六年九月十九日から十月十三日にかけて連載された。

13 嘉永三年の近江屋板切絵図「日本橋南芝口橋迄八丁堀霊岸島築地辺絵図」（市古夏生・鈴木健一氏編『江戸切絵図集　新訂江戸名所図絵別巻二』筑摩書房、平成9）には、山下御門と幸橋御門間の外堀に面した岸に、「此川岸ヲ俗ニ山城河岸ト云」と記されている。現在の東京都中央区銀座六・七丁目の、外堀通とJR線高架に挟まれたあたりと思われる。

14 金屋竺仙も香以の取巻連の一人。竺仙の編者『恩』（明治三十三年刊）については、伊藤一郎・早乙女牧人・堀敬雄・北島瑞穂氏らの研究、「橋本素行（竺仙）編『恩』翻刻㈠および解題・㈡」（「古典文学注釈と批評」第二・三号、平成17・12、19・3）が備わる。永機と竺仙との具体的な関わりについては別稿で述べる予定であ

る。

15 平村鳳二・大西一外著『新選俳諧年表』（書画珍本雑誌社、大正12）

16 『若しのぶ』自跋には、本書の版下筆者と同じ「素阿弥貫乎」の署名がある。森鴎外「細木香以」には「香以は相模国高座郡藤沢の清浄光寺の遊行上人から、許多の阿弥号を受けて、自ら寿阿弥と称し、次でこれを河竹其水に譲って梅阿弥と称し、其後又方阿弥と改め、其他の阿弥号は取巻の人々に分贈した」というくだりがある。貫乎の阿弥号素阿弥もその一つではなかったか、つまり貫乎も香以の取巻の一人ではなかったかと考えている。

17 田辺機一編『発句作法指南』（頴才新誌社、明治25）

18 其角堂を上野不忍池畔から向島三囲神社境内に移したのは、正しくは明治三年七月である。

19 ペリーの初来航は嘉永六年六月であるので、この時であれば癸丑六月とあるべき。また翌年の再来航は正月であるので甲寅正月となる。いずれにしても干支が合わないが、正月に着目すると安政元年（十一月改元）の句ということになる。

（えちご　けいこ・実践女子大学非常勤講師）